新宗教教団における体験談の位置

― 妙智會・立正佼成会・天理教 ―

島　薗　　進

はじめに

新宗教の諸教団の中で，何らかの形で体験談を信仰活動の構成要素として取り込んでいないものは，ほとんどないだろう。しかし，多くの教団の中には，体験談を大いに重んじる教団，さほど重んじない教団などあり，教団によって体験談のしめる位置にかなりのバラつきがある。ここでは，体験談を重んじる教団として霊友会系の２教団 ― 妙智會と立正佼成会 ― を，さほど重んじない教団として天理教をとりあげ，それぞれの教団で体験談がどのように活用されているかを詳しく記述することにしたい。天理教は長い歴史をもつだけでなく敗戦までの最大の新宗教教団であり，新宗教史全体を見る時，一つの参照軸となりうるものであるし，霊友会系教団は体験談の集団定例行事化がもっとも早く行われた教団の一つである大日本霊友会（初期霊友会）の系譜をひくものであるから，この両者を押さえることによって，新宗教諸教団における体験談の実態を調べる際の要点を知ることができると思うからである。なお各教団の実態は昭和５９年３月を基準とし，必要に応じてそれ以前の状況にも言及することにする。(1)

1.　妙智會における体験談

妙智會は昭和２５年に霊友会から独立した。(2)
初代会長宮本ミツ（１９００－８４，８４年３月の死亡後,「会主」とよばれるようになった）は昭和９年に霊友会に入会，昭和１１年に夫の孝平（１８９１－１９４５，「大恩師」とよばれる）が第７支部長となって以来，夫とともに支部会員を統率してきた。この第７支部が妙智會の母体である。独立後，宮本ミツのリーダーシップの下，新宗連で活躍するなど独自の歩みをとげているが，一面教団規模が巨大にならず，合理化への圧力が弱かったことなどのために，現霊友会以上にかつての霊友会の信仰内容，信仰態度を保存しているところもある。

妙智會の組織単位は支部・法座である。導いた会員３０名以上で準法座，５０名以上で法座，３００名以上で支部を設けることができる。しかし支部が成立すると，すべて直接

本部に所属するので，支部間の親子関係のつながりは制度上失われる。大きくなった支部は子支部を独立させるから，支部所属の会員には一定の限度があり，霊友会に見られるような巨大な支部は存在しない。昭和５９年７月現在の支部総数は４２３，その中で最大のものは実働会員数１５００世帯あまりという。これらの支部は全国２１の都道府県に分布し，都府県ないしそれを細分した地区ごとにある程度のまとまりをもっている。とくに，６つの教会（秋田，山形，新潟，群馬，千葉，山梨）と３つの道場（米沢，小名浜，名古屋）をめぐる地域の支部は，それらの修行の場を拠点として結合している。

本部と６教会，３道場で毎月開かれる供養会（くようかい），および各支部，法座や地区等で開かれる法座が，一般妙智会員が参加する基本的な集団定例行事である。供養会には一般の供養会と男子部，青年部，少年部のそれとがある。一般の供養会は，３道場と千葉教会では月に１度，他の教会と本部は２度であり，法座は１度か２度がふつうである。供養会は月の何日と決まっている供養日の決まった時間に行われるが，法座日は支部・法座の実情に合わせ，曜日で決めるところもあり，時間もまちまちである。

本部の一般の供養会は東京代々木の本部の本殿大講堂で，毎月１４日（大恩師宮本孝平の命日）と２８日（会主宮本ミツの命日，ミツが亡くなる前は宮本家の守護神の命日として意義づけられていた）に行われる。また，第２日曜日には同じ大講堂で青年部・男子部の合同供養会が，第３日曜日には本殿の修行道場で少年部の供養会が開かれる。各供養日には担当地区が割り当てられていて，交通整理・場内整理などを行う。この当番には参拝割当の意味はないが，遠隔地の地区が当番にあたった時などは，バスをしたてて団体参拝する。そうした時には，大講堂の約1,５００の座席では足りないことになる。ふだんでも，だいたい満席になるが，青年部男子部合同供養会の時は参拝者数がぐっと少なくなる。

本部の一般および青年部男子部合同の供養会のプログラムはだいたい表１のとおりである。宮本ミツ会主の死亡以前は，１４日と２８日には会長と理事長（宮本ミツの養子の宮本武保），第２日曜日には理事長が出席して「ご指導」を話すのがふつうであり，これが「法話」の中心であった。聴衆は時折，その内容をノートにかきとめる。この「ご指導」では，しばしばその日の体験説法の内容が話題にのぼる。また，理事や来賓のあいさつや法話が入ることもある。本部供養会の内容はテープに録音し，編集した上で各支部からの希望に応じて配っている。教会や道場での供養

９：００	開会
	御供養（読経）
９：５０	休憩
１０：１０	教団歌奉唱
１０：１５	体験説法（２人）
１０：４５	法話
１２：００	題目三唱
	閉会
	連絡事項伝達

（表１）妙智會本部供養会プログラム

会の内容も上記のプログラムと基本的には同様であるが，会長のご指導のテープが活用されることも多い。

次に，各支部や法座を単位として開かれる定例集会としての法座を見ていこう。機関誌『みょうち』（季刊）には，ほぼ毎号，支部や地域の活動の詳しいルポ「ここに法の泉あり」が掲載され，法座（集会）の場面の写真とともに，その行事内容も描かれている。本部での聞き取りとそれらのルポを総合すると，法座（集会）はほとんどの場合，支部長や法座主の自宅の１室ないし境を取り払った２部屋ほどを利用して行なわれる。熱心な支部長などは，特別の法座のための部屋を設けていることもある。まれには戸外（野外法座）や場所を借りての法座もありうる。法座に集まる人数は数人から１００人をこえるものまでさまざまである。最初に御法座（御宝前ともいう，仏壇のこと）の前に並んで御供養（「朝夕のおつとめ」＝霊友会の青経巻＝の読経）を行なうが，これは時間の都合で一部だけ（たとえば１６番と２５番）ですませることもある。その後，体験説法（体験発表），支部長・法座主の話，話し合い，連絡事項の伝達などが行なわれる。機関紙誌やテープ等を利用して，会長の法話や体験談を題材に話し合いがなされることもある。

人数が多ければ，参加者は御供養の時と同様に並んで坐り，話をする人はその前に出て，御法座（仏壇）を背にして立って語りかけるというのがふつうである。参加者が少なければ語り手が坐って話をしたり，全体がいくらか輪のような形に近づくこともある。ここでの体験説法（体験発表）は，長いものもあれば短いものもあり，深刻なものもあれば気楽なものもあり，人数もいろいろである。話し合いの内容が多様であることはいうまでもない。ある支部では毎回６０分ずつをこの話し合いにあて，「質問あり報告あり，導きの自慢話あり……自由に何でも話せる時間にしてある」[(3)]。こうした話し合いで個人の悩み事がもち出され，支部長等がこれに答えを示すということもある。集会中であると否とを問わず，このようにカウンセリング的な話し合いが行われる時，妙智會ではこれを「個人指導」と呼ぶ。本部では，理事長と７人の理事が会員個々人の悩み事や相談に応じる個人指導が行われている。

支部・法座単位の法座（集会）のほかに，ヨコ組織である地区等を単位に合同法座が開かれているところもある。地区の合同法座の場合，婦人部，青年部，男子部などに分かれて行われることもあり，各部合同で行われることもある。地区の中の支部長の家を利用するのがふつうだが，他の施設を利用し，時には洋室に机を並べて行うこともないわけではない。人数が多い時には，全体集会の途中で参加者がいくつかのグループに分かれ，輪を作って話し合いをすることもある。

供養会と法座に加えて，例年，宮本武保理事長の全国布教という形で，全国各地（約20

ヶ所ぐらいという，東京近辺では行わない）で大きな集会がもたれる。会場は教会を使ったり，公会堂等を借りる。その年ごとに,「法話のつどい」,「婦人のつどい」,「躍進のつどい」,「流産児供養のつどい」などと呼ばれ，その内容は機関紙誌にかなり詳しく紹介される。これらの集会では，まず午前中に，式典・供養，体験説法（一人のことが多い），役員あいさつ，理事長の指導（法話），決定発表（決意表明）などが行われる。午後は映画やアトラクションが行われることもあるが，中心は理事長の個人指導である。同じ会場で，理事長が聴衆の中に割って入り，聴衆がこれを囲み，個人の悩みに答える理事長の言葉に耳を傾けるという形が多い。

こうした布教集会は本部主催のもののほかに，支部主催のものもあり，本部から理事や布教者が派遣される。また，支部の発会式として，自宅や集会所などを借りて人を集めることもある。

集会とならんで重要な集団行動の機会は団参である。妙智會の団参修行には，身延山七面山への団参と千葉県九十九里町の「千葉聖地」への団参がある。千葉聖地での「聖地団参修行」は２００人単位（昭和５８年までは１００人単位）で二泊三日の間行われる。修行の内容は読経，唱題，講義，作業，車座に坐っての語り合い，個人指導などだが，「懺悔の修行」として一般参加者が体験説法的な語り（時間の関係上，多人数が同時に思い思いに発露することもある）を行う機会も含まれている。

また，特別な大行事のない年には，少年部，青年部，婦人部，男子部の代表による各部弁論大会が行われるが，その内容は体験談的なものがかなり含まれる。これは青年部の法話大会として昭和３３年に始まったもので，かつては地区予選が行われたこともあった。

妙智會の会員向け定期刊行物は月刊紙『妙智會』「「会報」とよばれる）と季刊誌『みょうち』の二点である（表２）。『妙智會』は教団行事のニュース・紹介，会長・理事長

機関紙誌名	回数	発行所	創刊	判型・頁数（通常）	読者対象	公称発行部数（約）
妙智會	月刊	妙智會	昭２５	Ｂ５・　８頁	一般会員	１０.７万
みょうち	季刊	妙智會・妙智会奉賛會	昭４０	Ａ５・１３６頁	一般会員	6.2万

（表２）　妙智會の機関紙誌

の法話・指導とならんで，ほとんどの号で１ページないし半ページを「体験」に費やしている。１ページを費やす場合，一人原稿用紙（４００字）４～５枚で２人分が収まる。『みょうち』は会長の法話，教団活動の報告や座談会，編集者らによる教義案内，支部，地区の活動ルポ（「ここに法の泉あり」）等とならんで，平均２３～２４ページにわたって１０～１１人（６０～７７号）の「体験記」と１，２篇の「ミニミニ体験」（５００字

ぐらい）が掲載されている。体験記の長さはさまざまだが，平均して原稿用紙約７枚前後である。各体験記の後には，必ず５００字前後の「指導」が付されている。

機関紙誌以外の教団刊行物としては，読経用経典『朝夕のおつとめ』のほか，宮本ミツの自伝にそった法話を集めた『道』（昭和５２年刊）が広く流布されている。これまで教義書として妙智會教学部編『妙智のおしえ』上巻（昭和４３年），宮本ミツの法話集『心に花を』（昭和４２年）『心の良薬』（昭和４５年），教団史『妙智への道』（昭和２７年），『宮本孝平遺珠と回想』（昭和３２年）といった書物が刊行されているが，現在は販売配布は行われていない。『妙智のおしえ』の中巻，下巻が未だ刊行されていないのは，信仰が知的な解釈に陥るのをきらうからであるという。宮本ミツの法話は昭和２５年の会報（『妙智會』）創刊以来記録されてきているが，昭和４０年以後はすべて録音されてきており，今後，整理編集の作業が進められていく予定である。

妙智會の宗教言語世界では宮本ミツ会主と宮本武保理事長の法話（指導）に大きな役割が与えられてきており，その分だけ，初期霊友会と比べて体験談のしめる位置が縮小してきている。一方，教義形成の面での合理化はあまり進められず，教義学習のシステムは整備されていない。それは，信仰の拠り所を教義よりも体験に求める体験主義の考え方や体験談を重視する姿勢と表裏をなすものである。

2. 立正佼成会における体験談

立正佼成会[4]は昭和１３年に霊友会から独立して発足しているが，２人の創始者，庭野日敬（１９０６－，開祖，現会長）と長沼妙佼（１８８９－１９５７，脇祖）の大日本霊友会での信仰歴は，それぞれ３年半と１年半の短期間であり，発足当時は小さな信徒集団を従えるにすぎなかった。また，戦後の急成長によって強い合理化圧力が加わり，活動内容が大きく変貌してきているから，その信仰活動のあり方は霊友会の原型的な信仰活動とはかなり異なった内容を含むものになっている。ここでは，地域信徒集団の活動を中心に，体験談がいかに活用されているかを見ていきたい。

立正佼成会は昭和３６年以来，導きのタテ関係による組織から地域わりのヨコ組織へと組織構造を根本的に転換させた。一般会員が参加する日常の信仰活動のもっとも大きな単位は，全国２２２ヶ所の教会である。この教会がさらに表３のように地域割りされて，数人の会員をまとめる班に及ぶピラミッド的組織を作っている。（　）内は各組織単位の責任者の役名で，これらの責任者を幹部と総称する。以下，東京への通勤圏の

教会	支部	地区法座	組	班
（教会長）	（支部長）	（地区主任）	（組長）	（班長）

（表３）　立正佼成会の地域組織単位

外縁（都心から５０～６０ km ）に位置するＴ教会を例にとってより詳しく述べていくことにしたい。

Ｔ教会は人口約１１万人（１９８０年１０月，以下の地域の人口や面積についても同様）のＴ市を中心とする４市，９町，１２村，総面積1,４６７Km^2，総人口約６３万人の包括地域をカバーしており，総会員世帯，約１１,０００世帯といわれる。現在１２支部に分かれているが，下部組織については資料の関係上，９支部だった昭和５６年段階の状況を述べる。各支部に５～１０，総数６６の地区法座，各地区法座に２～９，総数２４６の組，各組に２～１２，総数1,２６４の班が置かれ，支部と地区は地名，組と班は番号による名前が与えられている。以上のような細分化された地域別組織とならんで，壮年部，青年部（男子部，女子部，婦人部，少年部を含む），寿クラブ（老人）といった年齢層別の組織があり，支部ごとに責任者（お役）が決められている。信仰活動の場としては，本尊を祀った畳じき１００畳の法座場を含む道場と青年会館の二棟を中心とする教会のほか，２つの支部がそれぞれの法座所をもっている。

教会全体を単位とする月例行事は，道場の法座場で行われる６つの「御命日」である（表４）。御命日の行事はいずれも午前９時に始められるが，１日の教会御命日だけは，午前中に来れない人のために夜間御命日（午後８時～１０時）も行われる。御命日の行事の内容は毎回少しずつ異なっているが，昭和５９年３月１日のＴ教会教会御命日の次第は表５のとおりであった。９割以上が女性の参会者は次第にふえ，最後には２００名ほどになっていた。

１日	教会御命日
５日	虚空蔵菩薩御命日
１０日	妙佼先生御命日
１４日	七面大明神御命日
１５日	釈迦牟尼仏御命日
２８日	八幡大菩薩御命日

（表４）教会単位の御命日一覧

いずれの御命日も，研修，説法会，法座，教会長指導，来賓の話等で構成されているが，日づけによってどれに重みがあるかにちがいがある。説法会が行われるのは１日，５日，１５日で，１５日には毎回２名の体験説法が行われる。また，昭和５９年３月５日は教団創立４６周年記念式典であったが，この時も入会１年半の会員と支部長の体験説法があった。その日その日に説法者を出す支部が割り当てられており，その支部で説法者を選び，たいてい原稿を作って準備を整えている。説法会が始まると会衆の前に演台が持ちこまれ，説法者は聴衆に向かってマイクを通して語りかける。時間はここでも１人１５分が標準的である。

御命日や年中行事以外にも教会が主催する行事は多いが，ことに布教師資格認定試験のための研修会や母親教養講座など学習（教育）の内容をもつものが少なくない。昭和５９年３月のＴ教会では，この種の会がのべ７日間開かれている。

９：００	開会 君が代，教団歌奉唱
９：１０	読経供養
９：４３	休憩
９：５８	研修（『佼成』誌の会長法話を読み上げ，教務員が説明する）
１０：２８	説法会（体験説法１名）
１０：４２	教会長ご指導
１１：４０	かみしめ法座（支部ごとに輪）
１２：１０	題目修行 会員綱領，三つの誓い，お礼（唱和）
１２：２０	閉会

（表５）立正佼成会Ｔ教会教会ご命日行事次第
（昭和５９年３月１日）

支部が主体となる月例行事としては，まず１支部単位での支部御命日（法座所をもつ支部の場合），２～３の支部が合同で行うブロック御命日（法座所をもたない支部の場合）がある。Ｔ教会では２つの支部御命日がそれぞれの法座所で，また４つのブロック御命日が教会で別々の日に行われる。参加する人数は少ないが内容は教会御命日と同工異曲で，１～２名の説法が行われることが多い。それぞれの地域の中での支部活動は，導き，手取り（既入会者への布教）の布教活動と地区ごとの法座が主なものである。地区ごとの法座は月２回が標準的で地区の１家庭を会場とするが，この会場は特定の家（主に主任の家）に固定していることもあり，家々をまわって行うこともある。法座の前後の儀式的なことは唱題など最少限で，もっぱら話し合いに終始する。なお支部単位でも会員宅での研修会が月に２回ほど開かれる。

支部単位での重要な修行として道場当番がある（教会当番ともいう，また別に宿直当番と戒名当番がある）。道場当番は午前６時から午後３時まで教会や法座所の清掃，行事の準備，門番，物品の販売，来客の接待などの仕事にあたる。Ｔ教会では，法座所をもつ支部と青年部が月に１回，他の支部はほぼ３回当番がまわってくる。法座所をもつ遠方のＩ支部の場合，月に１回の教会当番に平均２５人ぐらい出るという。教会道場では毎日午前９時から午後３時まで法座が開かれている建前だが，とくに行事のない場合，実質的にはその主体は当番の人々である。

一般会員の参加する教会外での修行として本部団参がある。本部団参にはいろいろな種類があるが，ふだん行われるのは１泊２日と日帰りの修行団参であり，全国の教会から参加した会員たちが一堂に会して修行する。修行団参の主な内容は，大聖堂での行事と普門館や団参会館での行事に分かれる。大聖堂でのプログラムは仏壇を荘厳する「奉献の儀」の後は教会でのご命日とよく似た内容で体験説法と法座が含まれている。普門館や団参会館では「佼正ニュース」や会長の法話（ＶＴＲ）を視聴するのが主な内容である。昭和５９年３月，Ｔ教会からは３回にわたり４支部から計２００名が本部修行団参に参加した。

また，３月５日の教団創立記念日には２５人がマイクロバスで団参している。そのほか，幹部クラスの会員が参加する教会外の修業に青梅道場で行われる錬成があり，そこでも法座や体験説法が組み込まれている（青梅錬成は昭和４２年に青年部の修行として始められたが，初期には参加者一同による劇的な発露懺悔が行じられた）。

これまで，Ｔ教会を例にして一般会員が参加する行事を見てきたが，教会単位の行事はほぼそのまま本部の大聖堂でも行われている。ごく最近まで，東京都区内の教会はいずれも道場をもたなかったので，都区内の会員にとっては，大聖堂が大きな行事を行う場であった。本部での御命日は，５，１０，１４，１５，２８日の月５回であり，そのうち，５，１５，２８日の３回，説法会が行われる。本部の場合，説法者は初心の会員，幹部，教会長の３人が全国の教会から選ばれて説法する。

以上述べてきたように，立正佼成会における体験談の語りの場としては，法座と説法会がある。法座は広くいえば法に関わるあらゆる語り合いを含み，１対１の対話を「個人法座」というような使われ方もするが，標準的には法座主の指導の下，車座になって行う語り合いを指す。今まで法座が開かれる機会をいくつかあげてきたが，法座が開かれるのはこれらの機会に限られない。立正佼成会ではあらゆる機会をとらえて，この小集団による語り合いの場を作っていくのである。

立正佼成会の主な定期刊行物は，週刊紙『佼成新聞』，月刊誌『佼成』，『躍進』,『マミール』である（表６）が，このうち「自分の暮らしを見つめる女性誌」，「ハートフルな女の生活情報誌」などと銘うたれる『マミール』は信仰的色彩がきわめて薄い。『佼成

機関紙誌名	回数	発行所	創刊	判型・頁数(通学)	読者対象	公称発行部数（約）
佼成新聞	週刊	佼成新聞社	昭３１	Ｂ３・６～８頁	一般会員	１６６.８万
佼成	月刊	佼成出版社	昭２５	Ａ５・７６頁	一般会員	１６６.８万
躍進	月刊	佼成出版社	昭３８	Ｂ５・１１６頁	青年・一般会員	５７.２万
マミール	月刊	佼成出版社	昭４７	四六倍・１２８頁	非会員を含めた婦人層	２８.４万

（表６）　立正佼成会の機関紙誌（日本語）[5]

新聞』と『佼成』は会員全世帯に配布される建前である。『佼成新聞』はふつう６～８ページの紙面のうち１ページを原稿用紙８～１０枚ほどの長さの体験談にあてている（時に３人称の取材記事の形をとる）。昭和５８年の『佼成』は１月号を除く毎号，原稿用紙１５枚ほど６ページに及ぶ「体験手記」１篇を載せている。そのほか毎回特集記事で数人の会員がズーム・アップされ，信仰体験（またはそれに準ずる生活体験）が紹介されるが，それが一人称の形をとることもある。青年向け機関誌として出発した『躍進』は，今では

広く一般会員に配布されている。体験記は独立してとりあげられたり，特集記事の中の一部とされたり，さまざまな扱いをされているが，大ざっぱにいって全誌面の１０パーセント強（昭和５８年）をしめている。

会員向けの単行本は，主に佼成出版社からかなりの数のものが刊行されているが，中心は庭野日敬会長の著書や法話集であり，その他の書物も教義解説書，信仰指導書に類するものが多い。庭野日敬は早くから教義形成の志向をもっていたが，昭和３３年の「真実顕現」以後，教団をあげて教義確立の努力が進められてきた。最近では庭野会長の法華経解釈と仏教解説の著書（『新釈法華三部経』『仏教のいのち法華経』『庭野日敬法話選集第三巻　立正佼成会の教え』等）が教学の典拠として定着し，会員の学習の素材となっている。[(6)] 最近の体験談集としては，昭和４６年から５０年にかけて，それぞれ１０人の体験談を集録した『ドキュメント教えに生きる』シリーズが１８冊刊行され，また昭和４７年には４人の体験談をのせた『ドキュメント生きる』が出されている。

立正佼成会の宗教言語世界では，庭野日敬会長の思想と言葉にきわめて強い権威が与えられるに至っている。それは，一方では庭野自身の信仰体験に根ざし，日常的な言葉を土台としてはいるが，他方，法華経の解釈にもとづく体系的なものであり，学習による習得を必要とする仏教用語が随所で重要な役割を果たしている。一般会員は，庭野にならってそうした用語を習得し，法華経と仏教の正しい理解に到達するための学習を積み重ねることを要求されている。こうして「教義にもとづく言葉」が重視されるかわりに，「体験にもとづく言葉」の評価は低下している。しかし，早くに説法会や法座として定着した体験談活動は，信仰の実践の場ではなおひじょうに大きな位置をしめており，教義の学習とインテリタイプの指導層に異和感を感じる会員が少なくないのも事実である。

3. 天理教における体験談

天理教[(7)]の信仰活動の原型は，いうまでもなく教祖中山みき（１７９８－１８８７）とその周辺の人々によって形づくられた。しかしその後，明治２０年前後の教会組織の確立，明治４１年に至る別派独立運動，大正後期における大衆教会組織への脱皮，戦後の「復元」（原天理教への復帰）運動など，何度かの転期を経て，信仰活動を変容させてきている。一方，天理教の組織構造は，教会長の自主性が尊重され，中央の統制が末端にまで完全には及ばないような仕組があって，教会での活動内容は教会の系統や規模，地域や新旧によってさまざまである。以下の叙述は，そうした多様な信仰活動を筆者の知見の範囲で概括したものである。

天理教の信仰活動の基礎的な単位は，海外を含めて１６,７０７（昭和５６年，うち海外

１８６）ヶ所の教会である。布教者が１５名以上のよふぼく（本部で基礎的な教理学習を積んだ信徒）を獲得し，その他の条件も整うと分教会を設立する許可が得られる。教会長と彼に従う信者集団が教会を構成し，独立した活動単位となる。教会は儀礼や集会の場となる一定以上の広さをもつ広間（神殿）を備えていることが必要だと考えられている。さらに，活動の充実とともに，広間を発展させ，立派な建造物を設けることが活動の一目標になっている。こうして外形的にも独立していくのだが，それでもかつて教会長が所属していた教会（上級教会）との所属関係は失われず，その指導・統制を受け続ける。教会長は世俗の職業をもたずに教務に専念し，献金によって生活するのが本来の姿であると考えられているが，小規模な教会では教会長本人または家族の職業収入によって家計が成り立っている場合も少なくない。しかし，布教責任者である教会長と一般信者の間には，信仰指導者－被指導者という役割分担が明確に存在している。

教会での月例行事のうちもっとも重要なのは，月に一度決まった日づけに行われる月次祭である。一般信者が自分が所属する教会の月次祭への参列，ないし当日の参拝を求められるのは当然であるが，熱心な信者は上級教会や本部の月次祭に参拝することもある。月次祭の次第は，開扉，献饌，祭主玉串奉献，祭文奏上，おつとめ，祭典講話，というふうに進む。行事の中心はおつとめであって，坐りづとめとてをどり（『みかぐらうた』の「よろづよ八首」と「十二下り」），あわせて約９０分が，鳴物（伴奏楽器）９人（これはなかなか揃わない），地方（歌い手）１人以上，てをどり（踊り手）６人を揃えて（前後半で交代する時はその２倍の人員が必要である），にぎやかにかつゆったりと行じ（あるいは演じ）られる。祭典講話は祭主である教会長によってなされるのが原則であるが，上級教会の教会長らが話すこともある。以上の次第が終った後，酒食とともにくつろいで語り合う直会（なおらい）に入る。

かなりの割合の教会では，月次祭のほかにも一般信者の参加する月例集会が，１度ないし３～４度行われている。寄り日，婦人会，青年会，少年会，修養会，よふぼくの集い，入社祭，講話日などとよばれる集会である（以下，一括して「寄り日」とよぶ）。これらの集会は月次祭より儀式性の乏しいもので，おつとめは一部だけ行われ，鳴物やてをどりの練習，教典類や雑誌・書籍を用いた学習，「練り合い」とよばれる話し合い，講話・感話とよばれる体験談などが行われる。また，これらの集会と結びついたりしなかったりするが，毎月ひのきしん（労働奉仕）やにおいがけ（布教）が行われることもある。さらに熱心な信者や古くからの信者は，家庭内に布教所や個人祀として祭壇が設けられており，毎月教会長が訪れて祭典（布教所は月次祭，それ以外は講社祭とよばれる）を行う。

以上は月例行事であるが，活発な教会では毎朝信者が集まり，集会の形をとりうるよう

なところもある。そうした教会では，朝のおつとめ（坐りづとめ）の後に「朝席（あさせき）」として教会長の教話や『おふでさき』の奉読・解説などが行われるが，その際まれに一般信者の体験談が語られる場合もある。

上に述べてきた天理教の教会行事の中では，一般信者が体験談を語る機会は多くない。寄り日や朝席で感話（時に講話）とよばれる体験談が語られることがないわけではないが，それは教会の全体数から見れば，ごく一部の教会でのことである。一方，教会長や経験を積んだ布教者が一般信者に向けて話をする機会は，定例行事においてもそれ以外の時にも少なくなく，そこに体験談がもりこまれる。定例行事での教会長らの講話・教話は，体験談的な内容を含むことがある。また，天理教の教会には，礼拝場にいくつかの火鉢がならんでいる場合がある。火鉢を囲んで少人数のインフォーマルな語り合いが行われるわけである。そうした語り合いは立正佼成会の法座にも似て，信仰的カウンセリングや布教者の体験談の語りの場ともなるであろう。筆者がこれまでに出会った天理教教会長の中にも，苦難や挫折に満ちた生活の中から力強い信仰を確立するに至り，その生涯を印象深く語りうる人物が少なくない。(8)

教会外での天理教の日常活動に，地域組織（教区，支部，組）単位で行われるものがある。講演会，野球大会のようなレクリエーション，公共施設のためのひのきしん，一斉においがけなどである。においがけの１つのあり方に，青年会による路傍講演がある。街頭を通りかかる人に天理教の教えを語り，訴えるのである。これは明治末年以来の歴史をもつもので，かつては講演者を囲む人垣ができることもあり，その頃は体験談的な内容がまじえられることも多かったと思われる。しかし，今では路傍講演に耳を傾ける人はまれであり，台本が用意されることもあるような儀礼的なものになっている。

天理教において「講演」の語は独特の意味をもっている。教会組織の枠を取り払って，一般信者大衆や未信者の聴衆に向かって堂々と訴えかける語りがこうよばれる。天理教の青年会はこの講演活動とともに成長したのである。かつては無名の青年信者らが語り手となり，体験談的な内容を含めて語ることが少なくなかったようである。現在の主な講演会は少し形をかえ，よのもと会（教会を横断する信者のヨコの連帯の組織）や婦人会によって，教内の著名な話し手や布教者（教会長，教会長夫人，教会長ＯＢ等）を講師として催されるものである。よのもと会が主催し，または講師を派遣する講演会には，本部月次祭（２６日）の前後に天理市内で開かれる一般信者向けの「おやさと講演会」と布教者向けのより小規模な「布教者研修会」，月次祭の前後に各教会の信者詰所の要請に応じて講師を派遣する「ようこそおかえり講話」，地方に随時講師を派遣する「よふきぐらし講演会」があり，婦人会主催のものには，本部月次祭当日天理市で，また教区や各教会で随時開か

れる「母親講座」がある。おやさと講演会の場合，ふだんはその月の２５日昼に２会場，夜に１～２会場，２６日昼に２会場で，４０～４５分の講演が２～３講ずつ行われ，広い会場では，１２００～３００人も聴衆が入ることがあるという。また，講演とはやや性格を異にするが，天理教の経営する総合病院「憩の家」でも，毎月２６日に病院内の講堂で「憩の家講座」が開かれ，特定の疾患について，医師による病理解説の後，その疾患の教理的解説と体験談（語り手は信者でない場合もある）が語られる。

さらに，年に１度の青年会大会，婦人会大会，女子青年大会の日の午後にも，何ヶ所かで記念講演会が催される。このうち女子青年大会の記念講演会では，講演とならんで感話すなわち体験談も語られる。この折のみならず，女子青年関係のさまざまな集会で，感話が語られることが最近は少なくない。

講演そのものが体験談的な性格を保っているのは，青少年による信仰的弁論大会の場合で，青年会主催の「全教選抜講演大会」と天理大学の信仰サークルであるよふぼく会が主催する「天理総合学校講演大会」がある。講演大会は青年会発足（大正８年）以前からの長い歴史をもつが，現在の形のものは昭和５９年で３１回を迎えた。全国４７教区から選ばれた代表の中から全国９ブロックの大会で男女各１名を選び，１月２６日の春季大祭時に全国大会を開き，入賞３名を選ぶ。１人の持ち時間は８分で，かつては特別のテーマを設定したこともあるが，今は例年「天理青年の主張」という一般テーマのもとで，各人がサブ・テーマをつけることになっている。昭和５９年度第３１回大会のサブ・テーマを発表順に並べると，①理の親の声に生かされて，②用木（ようぼく）の使命，③音楽にかける私の青春，④みんな仲良くしようよ，⑤節（ふし）から生まれたもの，⑥節をのりこえて，⑦親神様は…教祖なら…をめざして，⑧百年祭に向かって，⑨天理時報が結ぶ縁，⑩教会のつとめ，⑪私は女子青年，⑫喜びの心，⑬この健康を感謝して，⑭節に生かされて，⑮白雪姫になれなかったタータン，⑯この素晴らしい時旬（ときしゅん）に，⑰親の愛に抱かれて，⑱母の出直しを通して（奇数が女性弁士）となる。天理総合学校講演大会は，１０月２６日の秋季大祭の前後に開かれ，天理教関係の諸学校から各１名，計十数名（昭和５８年は１４名）の代表が１人１０分ずつ発表する。また，大正１４年以来，天理高校の主催で全国高校優勝弁論大会が行われているが，テーマは社会問題等に関したもので，信仰的色彩はない。

天理教で一般信者の体験談を指す用語として「感話」があり，ある種の教会や婦人会（とくに女子青年）関係の集会で「感話」が語られることを述べたが，「感話」という語は，元来，修養科（それに先だつ教校別科）のカリキュラムの一つに与えられた名称であった。修養科とは，３ヶ月間，ぢば（本部の地）に住み込んで信仰を身につける修行課程である。[9] かつての天理教教師養成機関であった天理教校別科（６ヶ月）をひきつぐもので，

天理教の信仰生活に一身を投じようとする者，教会の子弟，容易に解決のつかぬ悩みを抱える者等，１７才以上のあらゆる年齢層の男女が毎月入ってくる。教会長など天理教の役職者や布教者は，ほとんど皆，修養科を修了している。昭和５６年の年間の修了生は１２,７１１人（各期平均約1,０００人）であり，この年によふぼくとなった２８,７３８人の４４.２３パーセントにあたる（ただし，修養科生にはすでによふぼくである者も少なくない）。

修養科生は，自らが所属する直属教会（本部に直属する教会）の信者詰所に起居し，詰所で信仰生活や研修を行う（これを「修練」という）とともに，天理教教会本部の施設で週６日間，学習やひのきしんを行う。そのカリキュラムの一例（１ケ月生＝１月目の修養科生のもの）は表７のとおりである。週に１回の感話の時間は，臨時の課目が入ったりする関係で，実際には３ケ月間で５，６回しか行われないのがふつうだという。１クラス５～６０人の同級生と担任講師を前にして，１人ずつ信仰体験を語る。『講師の心得』という手引書では，１人１０分を目安としているが[11]，講師の指導によって，また修養科生の性格によって実際にはいろいろのようである。３ケ月の間に１人２～３回まわってくるのが多い方だが，１回目は自己紹介，最後は修養科で得たもののまとめと今後の抱負といった内容になるという。一方，各詰所においても，修練の課程の一つとして感話があり，詰所に住み込んで修養科生の指導を受けもつ「教養係」の指導の下に，何度か感話を話す機会が与えられる。

	月	火	水	木	金	土
1	伝	手	教	伝	講	手
2	典	み	手	典	典	伝
3	感	典	伝	手	伝	典
午後	鳴		ひ	鳴	ひ	ひ
	少・手・点					

伝＝教祖伝　典＝教典
感＝感話　手＝おてふり
教＝教話　み＝みかぐらうた
講＝講話　鳴＝鳴物
ひ＝ひのきしん
少・手・点＝少年会育成または手話・点字講習

（表７）天理教修養科１か月生時間割の一例[10]

さらに修養科の３ケ月目には，その期の修養科生が一堂に会して感話大会が開かれる。各クラスから選ばれた代表が，原稿にもとづき１人８分で信仰体験を語る。日本語の不自由な外国語クラスの生徒がいる時は，そのクラスも代表を出し，同時通訳をつける。発表者の関係者でとくに希望する少数の人を除いて，一般の聴衆は認めていないが，後に述べるように，感話大会の発表の内容はさまざまな形で公表されている。修養科に入る前に深い体験と決断を経て来ている者，苦悩を抱えて修養科に入り３ケ月のうちに救いの体験を得た者が少なくないから，劇的・感動的な感話があいつぎ，この感話大会は修養科生一同にとって格別感銘深いものになるようである。

天理教教会本部関係の機関や出版社から出ている機関紙誌の主なものは，表８のとおり

機関紙誌名	回数	発行所	創刊	判型・頁数（通学）	読者対象	発行部数（約）
天理時報	週刊	天理教道友社	昭 5	B3・3～8頁	一般信者	26 万
みちのとも	月刊	天理教道友社	明24	B5・ 80頁	指導的信者層	2.4万
陽気	月刊	養徳社	昭24	A5・ 88頁	一般信者	11 万
みちのだい	年3回	天理教婦人会	昭29	B5・120頁	婦人会会員	3 万
あらきとうりょう	季刊	天理教青年会本部	昭22	A5・120頁	青年会会員	1.8万
大望	月刊	天理教青年会本部	昭44	A5・ 48頁	青年信者	4.4万
よのもと	年3回	天理教よのもと会	昭53	A5・ 48頁	指導的信者層	2.5万
天理時報特別号	月刊	天理教道友社	昭32	B5・ 8頁	一般信者・未信者	103 万

（表8） 天理教の機関紙誌（日本語）[12]

である。これらのうち体験談やそれに類する記事が掲載されているのは，『天理時報』『みちのとも』『陽気』『みちのだい』『よのもと』である。天理時報は昭和53年当時で10万部前後といわれ[13]，発行部数の増大はここ数年の購読者拡張運動の結果である。戦後，天理時報に体験談的な記事が定着するのは，昭和45年に「求道」欄が設けられてからで，原稿用紙4，5枚の一人称体験談が1篇ずつ掲載されてきているが，その供給源はほとんどもっぱら修養科感話大会だった。最近では，感話大会の体験談とならんで，他の供給源による体験談的記事も載せられており，昭和58年では毎号，昭和59年前半では1.5～2号に1回の割合で，6～8ページの紙面の1ページ近くが体験談的な記事にあてられている。ここ数年の『みちのとも』には，毎号布教体験記，信仰生活記に類するものが1，2篇のっているが，回心や救済体験を語った典型的な体験談が1年以上継続的に掲載されたことはない。『みちのだい』も昭和49年頃から体験談的記事がちらほら見えるようになり，昭和53年以来「おたすけのよろこび」という布教体験記が，また最近では特定の病気をめぐる体験記特集が載るようになった。『よのもと』も毎号1篇の体験談を，修養科感話大会から引いている。一般信者・未信者への配布パンフレット（1部10円）としての性格をもつ『天理時報特別号』は，天理教紹介と教理解説のいくつかの記事や写真が主内容である。毎号，一般信者の悩みに教会長らが答える「よろづ相談室」が1ページ分載っているほかには，体験談に類する記事はまったく含まれていない。

天理教の機関紙誌類において，ある程度以上の長さをもつ一人称体験談の伝統が乏しい（霊験譚の伝統はそれなりにある）中にあって，唯一，体験談の雑誌として多くの愛読者を得てきたのが『陽気』である。『陽気』は創刊当初から読者の体験記への需要に応えようとしていたが，昭和30年代に入ってから，毎号特集テーマを設定し，そのテーマに関わる体験記や教話や座談会を収めるようになり，その後この特集は体験記と座談会に統一

されていく。現在は毎号９～１０篇，総ページ数８８ページの半分に及ぶ体験談が載せられている。特集テーマは教理用語が多く，昭和５８年の各月の特集はそれぞれ「かりもの」「まことしんじつ」「縁談」「心のふれあい」「私のおやさま」「先あんじ」「あたえ」「病の根」「はこび」「かわい」「人生の転機」「親の思い」であった。語り手はすべて分教会長（またはその家族）で，物語の中に特集テーマについての教話的語りが含まれることが多い。各篇の長さは原稿用紙１５枚から２０枚とかなり長く，その人の生涯や信仰経歴についてのかなりの情報を含み，筋道たった体験記である。そのほか多くの号には，「心の泉」と題して，分教会長らが信仰上の師について語ったエッセイが２篇載せられているが，これも体験談の一種と見てよい。

これらの体験談のほとんどは，編集者が全国各地に取材旅行に出かけ，集めてきたものである。いくつかの地域を選び，体験談の素材をもちそうな教会長達を次々に訪れ，原稿を依頼しつつ長時間のインタビューを行うのである。インタビューによる情報が重要で，原稿を依頼しない場合さえある。後で原稿を受けとった場合も，編集の筆を入れないものはないという。

天理教の書物においても霊験譚集は古くからあるが，より発達した，回心の表白を含むような体験談が刊行されるようになったのは，戦後であり，それも最近のものが多い。『災の伝道者加藤きん』（金子圭助著，昭和５７年）というような布教者の伝記や『ヤクザから教会長へ ― 毛虫も蝶になれる ― 』（桑高清一著，昭和５６年）というような布教者の自伝に類する書物が，毎年数点刊行されている。一般信者の体験談集としては，『すばらしき人生 ― 信仰体験実話集』（一），（二）が昭和５３年と５７年に刊行（天理教道友社）されているが，これらはすべて修養科感話大会で語られ，『天理時報』と『修養科月報』（修養科内部の情報紙）に１度掲載されたものである。

以上見てきたように，天理教の刊行物における一般信者の体験談は概して少ない。これは日常の信仰活動の中に一般信者の体験談発表が組み込まれておらず，体験談の供給源が乏しいこととも関わっている。これに対し，かなりの信仰歴をもつ布教者クラスの人々の体験談は，『陽気』を中心にかなりの数のものがまとめられている。しかし，それは教話のジャンルに境を接するものになっている。天理教の定期刊行物は霊友会系の教団と比べて，信者数の割には発行部数が少なく，一般信者が日常的に接するものとはなっていない。それらは大衆参加のメディアとしての性格が弱いのである。そこにおける体験談が信仰上のエリートのものに傾きがちであるのも，このことと関わりがあろう。

一方，天理教の教義書や教義解説書は古くから数多くのものが刊行されている。『おふでさき』をはじめとする「原典」，『天理教教典』，『稿本天理教教祖伝』は信者がぜひ

とも学習すべき書として重んじられており，これらについての解説書の類も布教者（教会長ら）を中心とする巾広い読者層をもっているのである。

天理教の宗教言語世界では，教組中山みき（及び飯降伊蔵）に下った啓示を源泉とする上記の聖典や教義書にきわめて高い地位が与えられ，教義的言語の学習は教団活動のあらゆる局面に組み込まれている。一方，一部の教会を除いて，体験談は正規の信仰行事の中にそれ自体としては組み込まれていない。体験談が主内容をなす語りには，「感話」と一部の「講演」があるが，これが行われる機会は少なく，これに関わるのは少数者である。確かに教会長らの布教者による教話・講話はさまざまな機会に語られ，その中に体験談的な内容が折り込まれることは少なくない。しかし，一般信者はそうした布教者の体験談をもっぱら受容するにとどまり，自ら体験談を語る機会は乏しいのである。

4. 大衆参加と体験主義

以上の記述から明らかなように，霊友会系の２つの教団，妙智會・立正佼成会と天理教の間には，信仰活動の中で体験談がしめる位置に大きな隔たりがある。各教団が同じ規模をもっていたとして，体験談表出の場と表出者の数は，妙智會と立正佼成会が天理教をはるかに上まわる。大衆的集会においてある程度の長さをもった純粋な体験談を語る機会が，霊友会系教団ではふんだんに設けられているのに対して，天理教では年間に全教団を通じて数えるほどしかない。天理教の機関紙誌が掲載すべき体験談の供給源に悩む大きな理由はこの点にあった。天理教においては体験を語り合う小集会も定式化されておらず，機関紙誌の紙誌面に体験談がしめる位置も大きくなく，しかも発行部数は少ない。

さらに大きなちがいは，表出者の層のちがいである。天理教において体験談を表出するのは，主としてかなりの信仰歴をもつ人，とくに教会長やその家族である。熱心家が必ず通過する修行課程である修養科が，多くの人々にとって体験談を自ら語る最初のきっかけとなる。もちろん，そこでも筋道たった体験談を語るのはごく一部の人々である。これに対して霊友会系の教団では，あらゆる層の人々が体験談表出の機会をもつ。そこでは，新入会員は新鮮な体験をもっているだけに，語り手としてむしろ好ましいと考えられている。もちろん話は下手で教えの理解は浅いかもしれないが，かえって虚飾がなく，真実をありのままに語るので，強い感銘を与えることが多いと見なされているのである。

天理教においても，一般信者の体験談を信仰活動の中に取り込もうとする動きはかなり以前から存在し，近年とくに目立つようになっている。都市部で活発な布教を見せている教会では，霊友会系の教団に近いほどに日常活動全般に体験談が取り込まれているものがあるし[14]，『陽気』や『天理時報』のような比較的発行部数の大きい機関誌紙では，体験談

がかなりの位置をしめるようになっている。しかし，それらが一般の教会の日常的信仰活動に影響を及ぼし，体験談が定例行事として広く定着するにはほど遠いといわねばならない。

体験談がしめる位置という点での霊友会系教団と天理教のこの大きな相違は，どのような要因に由来するものであろうか。詳しい歴史的検討は別の機会にゆずるとして，[15] ここでは次の２点を指摘しておきたい。

⑴大衆参加の体質の有無 ― 霊友会系教団は在家主義の理念を掲げ，さまざまな局面で一般信者自身による行動，すなわち大衆参加を促している。そもそも彼らの先祖供養自体が，在家＝一般社会人が自分で自分の先祖を祀る行為であり，だからこそ庶民にまで文化のゆきわたる昭和の時代にふさわしい信仰のあり方と考えられたのであった。さらに，大衆参加の思想と姿勢が強くにじみ出ているのは「導き」＝布教のあり方である。会員はすべて布教者であり，信仰を始めたその日から導きにはげむよう促される。他者に働きかけることが基本的な信仰行為であり，修行であって，教義学習や儀礼習得やその他の修行に先んじるものとされている。体験談の表出ということも，すべての信者が一個人として対等の立場から自らの宗教体験を語るという理念によるものであり，この大衆参加の体質の１つの現れなのである。

天理教ではこの大衆参加の姿勢がやや弱い。確かに天理教においても，熱心家は布教（においがけ，おたすけ）への積極的取り組みを要求される。しかし，それほど熱心でなくまったく布教に関わらない者も少なくないし，月次祭の儀礼や集会での語りなどの面では与え手と受け手の区分がはっきりしている（典型的には講社祭）。天理教の基本的な信仰体系を１通り習得するには，かなりの時間がかかる。また，信仰体系を習得して指導の立場に立つ者は，その任務を遂行するために，世俗生活を全面的に犠牲にしなければならない。一般社会から隔離された環境で３ヶ月間かけて行われる修養科の研修は，一般信徒層と指導層（布教者層）との間の大きな距離を象徴するものである。

⑵体験主義の強さ ― 以上のことと密接な関係にあるのが，体験主義の考え方がどの程度重んじられているかということである。新宗教のほとんどの教団は，何らかの形で体験主義の思想をもっている。抽象的な観念や教義ではなく，生活や修行の中で得た信仰体験こそ信仰の拠り所であり，そのもっとも本質的な要素であると考えるのである。[16] しかし，その一方でどの教団も究極的な真理や正しい伝統とは何かを述べる説明の体系，すなわち教義の体系をもっている。どこまで体験を重んじ，どこまで教義を重んじるかは教団によってさまざまである。

初期の霊友会（大日本霊友会）はきわめて強い体験主義の志向をもち，それは妙智會や

初期の立正佼成会にも受けつがれた。そこでは，自らが実行して感得したことこそ真理の拠り所であるとされ，経典の解釈や教義の説明などは本質から外れた二義的なことと考えられていた。信徒が学ぶべき教えの基準となる書物は，霊友会においては自伝的法話を主内容とする昭和４７年の『天の音楽』に至るまで信徒に流布されなかったし，妙智會においても宮本ミツの自伝的法話集『道』以外はあまり活用されていない。立正佼成会のみは，庭野日敬の指導の下，大きな転身を図り，今では教義の体系をもち，教学がかなり重んじられるに至っているが，初期に根強かった体験主義が払拭されてしまったわけではない。霊友会系教団における体験談は，まさにこの体験から見出された真理を明らかにする場として位置づけられているのである。

これに対し，天理教では教団成立の当初から真理の基準となる啓示の書＝原典（『みかぐらうた』『おふでさき』『おさしづ』）やそれに準ずるとされる『こふき』が存在していた。そしてこの原典の中に究極的真理はすべて明らかにされており，原典にもとづいて真理が説かれていくべきだ，という考えのもとに，原典解釈と教義の体系化が積み重ねられてきた。もちろん天理教においても救いの体験は信仰の重要な拠り所とされ，体験に真理の源泉を認めようとする傾向はつねに存在してきた。しかし，それは他方に存在する教義への強い志向によっていつも枠をはめられていた。救いの体験によって信仰体系へのコミットを深めるものは，まずよふぼくとなることを求められる。そのよふぼくの資格を得るために９回出席せねばならぬ別席という研修課程の内容は，もっぱら教義の話（台本にもとづく）を聞くことである。より深いレベルの信仰を身につけるための修養科のカリキュラムの中心も教義や儀礼の習得であった。このような伝統のもとでは，体験を体験として語ることは，真理の充全なる表出のあり方とは見なされにくい。『陽気』の体験談が教理に関わる言葉をテーマとして特集され，話の中に教理を説くという要素が必ず組み込まれているのは，その一つの証拠である。現在の天理教にさまざまな形で体験談をとりこもうとする傾向があることは先に述べたとおりだが，一方で，体験談のとりこみに対する，教義を重視する立場からの根強い抵抗があることも事実なのである。

（付記）

本稿の執筆にあたっては，妙智會・立成佼成会・天理教の数々の方々のお世話になった。いちいちお名前はあげないが，あつくお礼を申し上げたい。

註

(1) 以下の叙述は，主として昭和５９年１月から４月にかけて，妙智會本部，立正佼正会 T教会で行った参与観察とインタビュー，天理教教会本部の諸部局と関連諸機関で行ったインタビューと資料調査にもとづいている。また，本稿の内容は次の３つの論文の内容と密接に関わっている。

①「回心論再考」（井上順孝と共著），柳川啓一・上田閑照編『宗教学のすすめ』筑摩書房，近刊。

②「宗教言語としての大衆的回心物語 ── 霊友会系教団の体験談について ── 」，『新宗教の比較研究』（仮題）雄山閣出版，近刊。

③「新宗教の体験主義 ── 初期霊友会の場合 ── 」，村上重良編『仏教と日本人10　民衆と社会』春秋社，近刊。

(2) 妙智會の組織構造や信仰活動のあり方については，西山茂「妙智會・仏所護念会」（１９７６執筆，未公刊）を参照した。

(3) 『みょうち』７７，昭和５９年４月，ｐ．８６。

(4) 立正佼成会の組織構造や信仰活動の実態については，立正佼成会土浦教会編『立正佼成会土浦教会二十五年のあゆみ』同教会発行，昭和５６年，内田昌孝他『信仰生活入門 ── 佼成会員の基本信行 ── 』佼成出版社，昭和５８年，室生忠『現代の宗教　立正佼成会』創出版，昭和５８年，を参考にした。

(5) 宗教色の見られぬ『マミール』は機関紙誌の中に含めるのは適切でないかもしれない。そのほか，教団の外郭団体である東京家庭教育研究所から，『子供に学ぶ家庭教育』（現在は年３回刊行，発行部数は１０数万部に及ぶという）が，また教育者教育研究所から『真の教育者をめざして』（年２回，８,０００部）が刊行されているが，いずれも「実践報告」などと題されて，体験談的な記事が多数のせられている。ただし，それらの中では立正佼成会独自の用語や宗教色が極力抑えられている。それらはまた単行本にもまとめられている。

(6) 梅津礼司「立正佼成会の発生基盤と教義形成過程」『中央学術研究所紀要』１２，昭和５８年７月。

(7) 天理教の末端教会の信仰活動についての筆者の知見の多くは，昭和５４年から５６年にかけて浜松市で行った実地調査から得られている。

(8) 拙稿「天理教の都市布教 ── 浜松市の場合 ── 」，田丸徳善編『続都市社会の宗教』東京大学宗教学研究室，昭和５９年，参照。

(9) 修養科，およびそのカリキュラムについては，松宮守『修養科の三ケ月』天理教道友社，昭和５７年，参照。

(10) 人間社編『天理・心のまほろば ── 心の本』（ムック天理第１号）天理教よのもと会，昭和５２年，１０１ページ。

(11) 天理教教会本部修養科『講師の心得』同科刊，昭和４６年，６０ページ。

(12) 発行部数の多くは，昭和５９年３月頃，発行所の関係者から口頭で聴取したものであるが，『あらきとうりょう』と『大望』については，天理教道友社編『天理教 ── 教理から現況まで ── 』天理教道友社，昭和５６年，に記載された昭和５５年の数字を示した。なお，このほかに子供向けの『さんさい』誌があるが，未調査のため省いた。

(13) 『みちのとも』昭和５３年１０月号，「巻頭言」ｐ．１。

(14) 代表的なのは，名古屋市の愛町分教会とその系列の布教所・出張所である。そこでは講話日の「前席（まえせき）」を中心に活発に体験談が語られる。また『愛町月報』や『愛光』（大阪の愛光布

教所発行）のような機関誌（とくに後者）には，体験談がふんだんに盛り込まれている。

(15) 霊友会において体験談が定例行事化していく経緯については，注(1)にあげた③の論文でふれた。

(16) 体験主義とは何か，また，初期霊友会の体験主義がどのようなものであったか，についても，注(1)の③の論文で論じた。